

そうなん音頭はこうして生まれた

(生誕二十八周年に寄せて)

作詞者 松原由幸

今から28年前(昭和52年)の東芝深谷工場は消費者運動(カラーテレビの買い控え)が沈静化した後の購買意欲の高まりによりフル生産に近い状況でした。東芝全体の売上規模が今より格段に小さかったとは言え、深谷工場は単独で全社の利益の4割近くを稼ぎ出していたように覚えています。

私達資材部門ではラインを絶対止めない事とコストダウンという大命題を背負ってストレスの溜まる毎日を送っておりました。

そんな毎日での楽しみは昼休みに皆でやるフリーテニス(別名パンポン)でした。上司も部下も仲良く並んでダブルスのコンビを組み、この時とばかり上司に強烈なスマッシュをお見舞いしたり、ノータッチを狙ってオーバーネットで返球したり、たまに池田宏さん(後の工場長)などは感極まってネットを飛び越えて相手陣地で返球するなどという大爆笑プレイを披露し、普段仕事では見せない愉快的裏の顔を垣間見せてくれ、それはそれは楽しい昼休みでした。



そんな7月のある日、朝からの雨が止まず楽しみフリーテニスは中止せざるをえませんでした。

何もやる事が無く机に向かってボーっとしていると、グループの才媛の山中愛子さんが「松原さん総務で“深谷工場の唄”の詞を募集しているわよ」と教えてくれました。工場ニュースの募集要綱には確かこんな事が書かれていたように思います。

「地域とのコミュニケーションを深め東芝のイメージ高揚を図る全員で楽しめる唄」

才媛のチャレンジを受けこれを見て「じゃあ一寸ひねってみるか」という気になりましたが作詞などには素人の私でしたので、まずこう考えました。

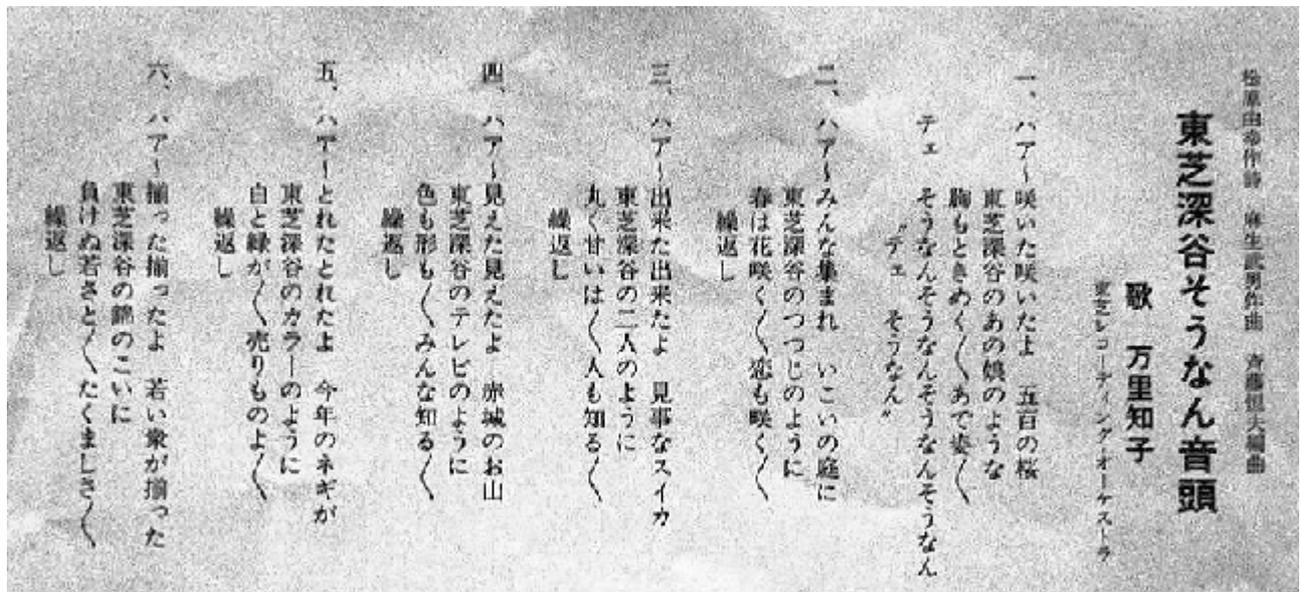
(深谷工場のセールスポイントと地域のセールスポイントを思いつくまま紙に書き上げ、これらの言葉の中から条件に合うイメージの良い言葉を選択しそれらを春・夏・秋・冬の順に並べて一番から四番までとする。各フレーズには必ず東芝深谷を入れる)というものでした。

一番の詞はいとも簡単に出来上がりました。

「はあー咲いた咲いたよ五百の桜 東芝深谷のあの娘のような胸もときめく胸もときめくあで姿あで姿」

これで調子がついてその昼休みの間に四番までの詞を一気に書き上げてしまいました。

(多少誇張がありますが当時の様子はお分かり戴けるかと思います)



応募が締め切られて数日後、各職場のレクリエーションリーダー（レクリーダー）による選考委員会が開かれました。応募作品は147点に上り（当時の新聞による）ノミネートされて十点程度が残されたようです。作品の審査については最初から応募者名を秘匿し、更に絞り込んだようですが、応募者はその経過を知る由もありません。

私達の資材部からはレクリーダーとして万能スポーツマンの好漢富田雅文さんが選考委員会に出席しておりました。応募者名秘匿ですので自分の職場から応募があった事は彼も知らなかったようです。

後に彼から聞いたところによるとノミネートされた作品はどれも甲乙付け難く中々入選作が決められなかったようですが、たまたま富田さんも私の作品に目が止まり「この作品は短いけれど良い味してるよ。みんな良く味わってみて」と言ったのだそうです。

暫らくして「そう言われればそうだね」と言う声が高まり、条件付で採用と言う事になったそうです。

条件とはこうでした。

四番まででは短いのであと二番追加して六番までとする。

その事はその日の内に私に伝えられました。

さあ大変。あと二番をどうしようかと考えた私は四番までで使った残りの「言葉」を掻き集め四番までと同様の要領で急ぎ追加して仕上げました。追加した五番、六番の完成は翌日だったように覚えています。

そうこうして取り敢えず「原作」が完成しました。

実はこの時点では「**そうなん**」という言葉は歌詞の中には使っておりませんでした。多分レクリーダー選考委員会で唄の題名をつける段になってインパクトのある方言の「**そうなん**」にしようと思ったのだらうと思います。

（そう言う意味ではそうなん音頭は皆で作り上げた唄なんですね）

このような経過で誕生した詞「**そうなん音頭**」は東芝EMIに託され更に補作され曲を付けられ専属



歌手の万里知子さんが歌うドーナッツ盤レコードとして誕生しました。

さらに驚いた事に踊りの振り付けまで考案され東芝夏祭りを盛り上げる恰好のテーマ曲となった訳です。

ここで、素人の私が何故作詞出来たかについて一言触れさせていただきます。

当時私は資材部門で購入部品中心にテレビのコストダウンのためのVA（価値分析/価値工学）と言う仕事を担当しておりました。

テレビは月15万台程度生産し、一台10円のコストダウンで毎月150万円年間せは18百万円もの純益が確保される訳で、当時は数10円のアイテムは比較的簡単に見つける事が出来ました。これを提案書の形でまとめて設計部門に行き設計変更をして貰う仕事でした。設計部門の方々からは少々煙たがられる存在でしたが効果が認められてからは全社的・組織的推進となった事は皆様ご存知の通りです。

VAでは材料や部品、製品の持つ働き（機能）を「
を する」と言う風に簡単な言葉に置き換えた上で、
する方法や材料にはどんなものがあるかを可能な限り色々調べ上げ、その中で与えられた制約条件を満足し、かつコストが今より安くなる方法を選び出します。こうして決めた別の方法の機能、性能を確認した上で設計部門に提案するのです。
こういった仕事の中で する方法は常に頭の中に

蓄積して置き、必要に応じて引き出すという訓練が知らず知らずの内に身につけておりました。作詞はこれの無意識の応用だった事が後になって自分自身で解りました。

昭和52年7月24日、この日は「東芝深谷そうなん音頭」がデビューする記念すべき日となりました。

それまでの盆踊り大会を改称し「東芝夏祭り」となったのです。東芝26工場中自前の唄を持つ唯一の工場として初回のこの日は大層盛りあがりました。

私も家内と五歳の娘を連れて会場に出かけておりました。祭りも最高潮に達する頃突然放送で「作詞者の松原さん会場にお出ででしたらステージまでおいでください」と呼ばれました。



事前になんの予告も無かったのでびっくりはしましたが、とにかくステージに上がると作詞者であることを紹介され片桐前光工場長から記念品を授けられました。

家内も娘も大喜びで、帰宅して早速新宿伊勢丹の包装紙の箱を開けると中にはガラスのコップ(クリスタルではなかった)が六個美しく輝いておりました。

時は流れ会社を取りまく環境は大きく変り、歌詞も現在にはそぐわないものになりましたが、東芝深谷工場がある限り遺産的価値のある唄を残せたという喜びと、それを聞くたびに楽しい思い出となって甦る会社生活に今は大変感謝しています。(完)

⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

以上一つよりくり返へして踊ります。

東芝深谷
そうなん音頭

振付 深谷流家元
深谷豊扇

輪踊りの反時計まわりです。前奏四拍間ききましたら最初のみチョンチョンがチョンと拍手して下さい。

一つ(二拍間)
右足を右前に出して右手右前に伏せて上げ左手伏せかざす。(図1)

二つ(二拍間)
右足を後ろにひいて、右手伏せかざし左手伏せて左後ろ斜め上に上げる。(図2)

三つの四つ(四拍間)
両手伏せまわして右足より三歩右前に進み左足を上げて右手あげかざし左手二の腕にそえる。(図3)

五つの六つ(四拍間)
左手左足で図1、2、の反対を行う。(図4)

七つの八つ(四拍間)
左足より三歩左前に前進、左手あげかざし右手二の腕にそえ、右足を上げる。(図5)

九つ、十一、十二(八拍間)
右足よりランニングで三歩、左足より三歩で右唇所まわす。(図6)

十三、十四(四拍間)
右足を左足前に出して左上でチョンと拍手し。(図7) 右足ひいて右下でチョンと拍手する、十五、十六(四拍間)
左足を右足前に出し右上でチョンと拍手し、左足ひいて左下でチョンと拍手する。(図8)